

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム  
派遣研究報告書

2012 年 10 月 28 日

派遣者氏名（専門分野）	久岡加枝（音楽学）
-------------	-----------

下記のとおり報告します。  
記

研究テーマ	コーカサス音楽における「山岳イメージ」の構築 -ソ連期 1930 年から 40 年代のグルジアの作曲家を中心に-
-------	---

派遣期間

2012 年 8 月 31 日 ～ 2012 年 10 月 1 日

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	グルジア	トビリシ	トビリシ音楽院	ルスダン・ツルツミア教授
	グルジア	トビリシ	議会図書館	
	グルジア	トビリシ	国立フォークロアセンター	

派遣先で実施した研究内容

派遣先ではトビリシ音楽院付属伝統多声音楽研究センター (<http://www.polyphony.ge/index.php>) に在籍する傍ら、隣接する民俗音楽研究室のアーカイブ（ソ連期の音楽学者によって採譜された民謡譜とその学術的分析も含む）の調査を行った。これまでの調査結果と今回の調査から、帝政期、ソ連期、現在のグルジアの音楽学者における、「民族音楽」の起源をめぐる共通の見解が徐々に明らかになってきた。その調査結果の一部は、滞在期間中に伝統多声音楽研究センターで開催された第六回シンポジウム The Sixth International Symposium on Traditional Polyphony で報告することができた。

さらに並行して議会図書館 (<http://www.nplg.gov.ge/eng/home>) でソ連時代のグルジアを代表する新聞『共産主義者 კომუნისტო』や、芸術批評が繰り返された雑誌『ソヴィエト芸術 საბჭოთა ხელოვნება』の記事を中心に、1930 年代から 40 年代の音楽状況（共産主義体制下での民謡合唱団の編成や作曲家、音楽学者の活動等）の分析を行った。なお、これらのソ連期のグルジア語の新聞・雑誌は報告者が知る限りマイクロフィルム化が進んでおらず、現地ではかほぼ読むことのできない貴重なものである。

また、ソ連時代を代表するグルジアの作曲家 Sh.ムシュヴェリゼの個人コレクション調査からは、山岳の民謡をモチーフとした交響詩『ズヴァダウリ』（1940）に代表されるさまざまな作品の創作過程が、残されたフィールド日誌や手稿譜から明らかとなった。

また、これらの調査と並行してグルジア国立フォークロアセンター (<http://folk.ge/#>) のアーカイブ調査を行った。ここに保管される帝政期からソ連期のさまざまな作曲家や音楽学者によって採譜された民謡の手稿譜からは、ムシュヴェリゼらの採譜者が、五線譜には表せない民謡の微妙な高さの音に注意を払い、芸術音楽においてそれらの「微分音」を「民族性」の表現手段として反映させていく過程が明らかとなった。

## 研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

当初目的としていた作曲家の創作活動については、今日のグルジアにおいて、ソ連期の作曲家の作品のデータベース化や手稿譜の一般公開がまだまだ進んでいないということもあり、当初予定よりも研究が難航した。一方で図書館での新聞・雑誌記事の調査からは、西グルジアを中心とする帝政期からの伝統復興の流れを受け継ぐ形で、ソ連期においても、西部の合唱団を中心に音楽活動が行われていたことが明らかとなった。またそれらの活動は共和国内に留まらず、連邦中央にまで広がっていったことが明らかとなった。特に重要な出来事は、1934年のザカフカス連邦（グルジア、アルメニア、アゼルバイジャン）におけるコンクール形式の芸術祭典オリンピアード *Олимпиада* と、37年のモスクワにおけるグルジアの芸術祭典デカダ *Декада* であり、これらのイベントで歌われた民謡は、その後の時代も民族を代表するものとして定着していった。これらの民謡に「民族文化」としての価値を見出し、合唱団のレパートリーに取り込んでいったのは知識人・音楽学者たちであり、今回の調査からは、こうした知識人と民衆の相互作用によって今日の音楽文化が形成されてきたことが明らかになってきた。一方で、ソ連期30年代に中心的に活躍していたのは、西部を中心とする限定された地域であり、東グルジアの山岳地帯の音楽に関しては、「民族文化」から取り残される形となっていた。しかしながら、「取り残された」音楽の中にプリミティブな要素を見出したり、民族文化の原型を探る動きが、前述のムシュヴェリゼなどの作曲家や音楽学者たちの間で芽生えつつあり、後の時代の音楽文化の新たな動きへと繋がっていったことも注目される。

## 派遣後の研究発表の予定

上述のとおり、研究成果の一部はすでに *The Sixth International Symposium on Traditional Polyphony* において発表した。これ以外の調査内容を、いくつかの論文としてまとめ、『美学』などの学術雑誌や、*International Review of the Aesthetics and Sociology of Music* などの海外の媒体に投稿し、これまでの研究成果とともに博士論文としてまとめていく予定である。